

# 相対的剥奪の社会学

石田 淳

## 1. はじめに

本稿は、現在筆者が共同研究者とともに取り組んでいる、相対的剥奪モデルをめぐる一連の研究プロジェクトの概要と現在までの成果について概説し、今後の研究の展望を述べることを目的とする。

相対的剥奪の概念とその理論が明確な形で示されたのは、S・A・スタウフアーらによる第二次世界大戦時の従軍兵の包括的研究『アメリカ兵』<sup>①</sup>がその嚆矢であるが、そのアイデアは一九世紀の社会学の古典期にまでさかのぼることができる。また、個人と集団（ミクロとマクロ）、意識と状況（主観と客観）といったコンセプトを内包し、一見逆説的な経験的知見を説明するものであり、そうした意味で相対的剥奪はきわめて社会学的な概

念・理論である。

しかしながら、近年においては、相対的剥奪概念・理論は、小集団実験を枠組みとする社会心理学的研究や、経済不平等指数との関連での経済学的研究において取り上げられることの方が多いように見受けられ、社会学的な理論枠組みの中で十分に生かされていない嫌いがある。一方で、グローバル化による経済不平等の進展や、BRICSといわれる新興国での急激な経済発展という状況の中で、あらためて人間の幸福の意味が問い直されている現状にあつて、ますます相対的剥奪論の重要性は高まりつつあるように思われる。

そこで、われわれは特に、経済的不平等指数との関連から相対的剥奪をモデル化したS・イザキの研究を出発点として、それらをさまざまに応用して、既存の社会学

的知識とリンクすることによって、現代的な「相対的剥奪の社会学」を確立したいと考え、現在精力的に研究を行っている。

本稿では、まず相対的剥奪の概念史を簡単に確認し、イザキのモデルを紹介した上で、われわれが行っている研究について触れたい。

## 2. 相対的剥奪概念小史

相対的剥奪の概念は社会学のみならず、社会心理学や経済学、政治学でも用いられている。ここでは、周辺領域を含んで網羅的に概念の歴史を振り返ると言うよりは、最終的にイザキのモデルへとたどり着くための道筋をたどりたい<sup>②</sup>。

### 2.1 トクヴェイル

まずは、議論の出発点となるように「相対的剥奪 (relative deprivation)」を「絶対的基準に基づく不満ではなく、他者との比較に基づく相対的な基準によって生じる不満」とラフに定義しておく。この概念そのものは、S・A・スタウファアらの『アメリカ兵』における兵士の不

満を巡るパラドックスを解くキー概念として導入されたものであるが、同種のパラドックスは、一九世紀前半の優れた政治・社会学者であるA・ド・トクヴェイルによって、より広い文脈において発見されている。

トクヴェイルは、一八三〇年代アメリカでの観察をもとにして、アメリカ論の古典である『アメリカのデモクラシー』を書いている<sup>③</sup>。そこで、トクヴェイルは「諸条件の平等」としてのデモクラシーを根本原理とするアメリカ社会において、人々の中に「特有の憂愁」が見られることを指摘する<sup>④</sup>。そして、この原因を平等が進展する社会において逆説的に高まる不平等への不満に求めている。いわく、「不平等が社会の共通の法であるとき、最大の不平等も人の目に入らない。すべてがほぼ平準化するとき、最小の不平等に人は傷つく」<sup>⑤</sup>。デモクラシーによる平等化は確かに階級の壁を壊しはしたが、今度は人々は万人との競争にさらされ、逆にいつそう不平等に敏感になりまた焦燥を覚える。

社会状況の改善が逆に人々の不満を高めるといふ先のパラドックスと同種の状況を、トクヴェイルはフランス革命においても見いだす。トクヴェイルは経済的發展や平等

がもつとも進んだ地域において人々の不満がいつそう高くなり、そうした地域が革命を主導し、逆に発展から取り残された地域においては旧体制が残存したという事実を指摘し、「このような情景には驚きを禁じ得ないが、歴史はこれと同様の光景で満ち満ちている」とパラドックスの歴史的な遍在性を示唆している<sup>⑤</sup>。

このようにトクヴィルが見出した、近代化の過程で階級障壁が溶解し平等化が進むときに逆説的に見られる人々の不満や「特有の憂鬱」は、その後一九世紀後半においてE・デュルケムによって指摘された「アノミー」——社会的拘束の弱体化による欲望の無限昂進——へとつながる、近代社会における根本的な社会意識であると考えられる<sup>⑥</sup>。

## 2.2 スタウフアーら

トクヴィルやデュルケムが、近代化・平等化という歴史的な視点から指摘したパラドックスを、データに基づきあざやかに描き出し、それらを「相対的剥奪」という概念と「理論」によって解釈して見せたのが、スタウフアーらの『アメリカ兵』である。これは、第二次世界大戦中

のアメリカ従軍者に対する大規模調査に基づく社会心理学的研究の成果であり、また現代的な相対的剥奪論の出発点となった画期的な研究である。

スタウフアーらが相対的剥奪の概念を用いて解釈したデータにはいくつかのものがあがるが、その中でもっともよく知られているのが、兵士の昇進に対する評価のデータである。これは、「能力のある兵士は軍隊での昇進機会が大きいとあなたは思いますか」という質問に対して、「大きい／まずまず大きい／どちらともいえない／あまりない／まったくない」の五件法によって答えるものである。憲兵隊と航空隊に属する徴兵後一～二年の白人兵士に対して尋ねられた。それぞれの部隊には、「一等兵・上等兵」も昇進した「下士官」もいるし、それぞれの部隊には「高校以下の学歴（低学歴）」も「高卒もしくは大学教育（高学歴）」もいる。しかしながら全般的に言つて、憲兵隊と航空隊という部隊の別と学歴の高低を掛け合わせて四つのカテゴリーを作ると、「相対的に昇進機会の少ない部隊には、昇進機会の大きい部隊よりも昇進機会について好意的に評価する人たちの割合が多い」<sup>⑧</sup> という一般的な傾向が見られることが分かった。

「昇進機会の認知」である質問項目を、昇進機会に対する好意／非好意や満足／不満と解釈することには一定の留保が必要であるものの<sup>⑨</sup>、ここで、スタウファアーらが示したデータを用いて、各カテゴリーの昇進率と、各カテゴリーにおいて「あまりない／まったくくない」と答えた兵士の割合を「剥奪率」として、それらをサブカテゴリーごとにプロットした図を示す(図1)。これを見ると、憲兵隊・低学歴から航空隊・高学歴まで、集団としての昇進率が上昇し状況としては明らかに改善しているにもかかわらず、昇進機会に批判的な兵士の割合が増えていることが分かる。

スタウファアーはこの事例について、兵士は「同じボートに乗る仲間」との比較によって期待水準を構成し、それと自らの境遇との比較を通して評価が行われるためである、との解釈を提示している。また、この事例だけでなくさまざまな複数の「一見するとパラドキシカルな結果」を相対的剥奪の枠組みで説明している。

このスタウファアーらの研究の後、「中範囲理論」の提唱者として知られるR・K・マートンは、比較対象としての「準拠集団」とその理論と相対的剥奪(論)を明示

的に結びつけることによって、議論を整理した<sup>⑩</sup>。マートンらの整理も手伝って、相対的剥奪論はその後、社会学、社会心理学やその周辺領域における有用な説明概念として定着していく。

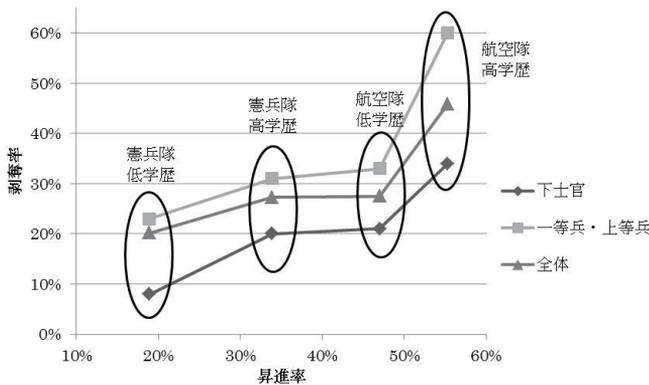


図1 『アメリカ兵』(p. 252)における昇進率と剥奪率のデータ

## 2.3 ランシマン

W・G・ランシマンによる一九六六年出版の『相対的剥奪と社会的正義』は、相対的剥奪をキー概念にして社会的な不平等への人々の態度を、二〇世紀イングランドの歴史的な文脈と、さらに一九六二年に実施された量的調査の分析を通して研究した成果である<sup>11)</sup>。しかし、経験的な研究そのものよりも、「相対的剥奪の個人的条件」として、相対的剥奪の定義を下したことが後の理論研究に大きな影響を与えた<sup>12)</sup>。

ランシマンによれば、(i) 個人AはXをもっており、(ii) Aは、過去や将来の自己像を含む現在の自分以外の誰かがXをもっている(本当に持っているかどうかにかかわらず) 見なしており、(iii) AはXを欲しいと思っており、(iv) AはXを持つことが可能(Tealish) であると思つてるとき、個人AはXについて相対的に剥奪されるという。Xの所有には負の財を持たないことも含む<sup>13)</sup>。

ランシマンの定義は、特に社会心理学的研究の文脈では、その後の研究者によって(iv)のフィージビリティの内実や構成要件の組み合わせについて、さらに精緻な

検討がなされることになる<sup>14)</sup>。そして、この定義はまた、次節で導入するイザキの相対的剥奪モデルの基礎ともなっているのである。

### 3. イザキの相対的剥奪モデル

S・イザキは所得分配や不平等指数を研究する経済学者である。彼は、不平等指数としてもっとも流通する指数であるジニ係数の解釈として、「相対的剥奪とジニ係数」という論文を書いている<sup>15)</sup>。そこでイザキは、ランシマンの定義に基づいて、所得を対象にした個人相対的剥奪指数、そしてその社会的平均である社会的相対的剥奪指数を考案している。そして、社会的相対的剥奪指数を平均所得で基準化したものがジニ係数に他ならないことを証明している。

ここでは、イザキによるオリジナルの定式化よりも、ランシマンによる定義との関連がより明確になるヘイトランバートによる再定式化を導入する<sup>16)</sup>。

まず、ある個人にとつて準拠対象となる集団をここでは社会全体であると見なす。さらに、対象Xを自分が持つていない所得とする。そうすると、自分より所得レ

ベルが低いものとの比較においては剥奪は生じないが、自分より所得を多く持っている者との比較では所得の差が  $X$  となり、それについての剥奪感が生じる。一般化して言うと、所得  $y_i$  をもつ個人が所得  $z$  をもつ個人と所得比較した場合の剥奪の程度は

$$D(y_i; z) = \begin{cases} z - y_i & y_i < z \\ 0 & y_i \geq z \end{cases} \quad (1)$$

となる。所得  $y_i$  をもつ個人の個人相対的剥奪度は準抛集団における任意の他者との比較によって生じる剥奪の期待値と定義される。ここで準抛集団を社会全体として、社会の所得分布の分布関数を  $F$  とおく。  $y^*$  は所得分布の最大値である。このとき個人相対的剥奪度は

$$RD(y_i) = \int_0^{y^*} D(y_i; z) dF(z) \quad (2)$$

と定義される<sup>7)</sup>。この定義より式の変形によって、別表現

$$RD(y_i) = \int_{y_i}^{y^*} (1 - F(z)) dz \quad (3)$$

を得る。さらに、個人相対的剥奪度の社会的平均は

$$RD = \int_0^{y^*} RD(z) dF(z) = \mu G \quad (4)$$

となる。  $\mu$  は分布の平均、  $G$  はジニ係数である。ここから、ジニ係数は社会的相対的剥奪度を平均所得で基準化した指数である、という興味深い解釈が得られる。

また、この定義では社会全体を準抛集団としているが、特定の準抛集団を設定し、準抛集団における所得分布の情報を用いることによって、準抛集団内の比較のみによって得られる剥奪の程度を算出することができる。

イザキの個人的・社会的相対的剥奪度は、ランシマンの定義に適切に基づく指数であること、計算が容易であり明確であること、何より、よく知られたジニ係数との対応が明確になされていることから、その後少なくとも理論的・経験的研究において取り上げられ、理論と実証の両面から応用が展開されている。

#### 4. イザキの相対的剥奪モデルの応用

イザキの相対的剥奪モデルは、主に不平等指数との関連や指数の公理的構成といった観点から理論経済学者によって取り上げられるか、もしくは、近年では社会疫学

調査データの分析やあるいは労働移民の実証研究にも応用されるようになっていた。しかしながら、このイザキのモデルからは豊富な社会学的インプリケーションをくみ出しうるにもかかわらず、社会階層や社会的不平等、そして社会意識研究などの社会学分野における応用は驚くほど少ない。

そうした背景もあり、筆者と共同研究者は、イザキの相対的剥奪モデルに注目して、社会学的な発想の文脈においてこれを応用・発展させるための、いくつかの研究に取り組んでいる。以下では、そうした研究の途中経過を簡単に紹介したい。

#### 4・1 計量モデルによる実証研究

社会階層と関連する人々の意識（階層意識）は、何らかの形で他者との比較という要素が関連するものと考えられる。そもそも、階層という概念自体が上下関係を含意している以上、階層における自己の位置を何らかの形で評価したり満足感を形成する場合、（実在であれ想像上であれ）他者の存在が不可欠になる。つまり、階層意識の形成メカニズムの一つのプロセスとして準拠集団

内での他者比較による相対的剥奪が考えられる。

そこで第一に、一九五五年から一〇年ごとに行われている大規模階層調査である「社会階層と社会移動全国調査（SSM調査）」の二〇〇五年調査データを用いて、イザキの個人相対的剥奪指数、そしてその関連指数として相対的満足指数、平均からの乖離を示す総合評価指数を導入し、収入ならびに生活全般の満足感を説明する重回帰分析を行った<sup>⑧</sup>。

分析の結果以下のこと明らかになった。収入満足については、男性において個人収入の他者比較による剥奪度が、収入の多寡そのものとは異なる独自の規定力を持つことが分かった。特に、年齢階層を準拠集団とした剥奪度をもっとも説明力を高めた。一方、女性においては個人収入の他者比較の規定力は見いだされず、女性については男性とは異なる評価メカニズムが示唆された。生活満足については、世帯単位の収入比較による剥奪度が大きな負の効果をもち、絶対額よりも強く満足感を規定していることが明らかになった。特に、回答者の性別や年齢階層といったデモグラフィックな準拠基準、そして市郡規模という地理的な準拠基準が、職業階層や教育レ

ベルという社会経済的地位基準と比べて相対的に大きな説明力を持つていることが分かった。

さらに第二に、階層意識の中心尺度として長年にわたって注目されてきたのが「階層帰属意識」である。S M調査においては、「上／中の上／中の下／下の下／下の下」の五つの階層のうち、主観上の自己の所属階層を尋ねる質問であり、日本においては七〇年代から安定して中に回答が集中する中意識現象が見られることで知られている。この階層帰属意識について、前田豊氏との共同研究において、イザキの個人相対的剥奪指数における他者比較関数(式(1))を一般化した主観的地位評価指数によって、階層帰属意識と所得との間のマクロ・ミクロレベルでの連関を説明する研究を行っている<sup>20)</sup>。さらに第三に、所得についての主観的評価分布の生成を、相対的剥奪指数を組み込んだ「最適地位選択モデル」によって説明する試みにも取り組んでいる<sup>21)</sup>。

#### 4.2 新たな指数作り

イザキの相対的剥奪指数の提案は、剥奪指数や不平等指数の理論的研究に大きなインパクトを与えた。その後

の研究としてはイザキ指数の理論的特性を検討した研究や、公理論的に指数を拡張した研究、あるいはイザキ指数に影響を受けながらも別の定義から構成される指数を提案した研究がある<sup>22)</sup>。

筆者は、イザキの相対的剥奪指数の研究を受けつつ、さらに分配的正義論の規範理論を導入することによって、人びとの感じる相対的剥奪を、「機会不平等に起因する相対的剥奪」と「そうでない剥奪」に分けることによって、ジニ係数を規範的観点から分解する手法と指数の開発を試みている<sup>23)</sup>。

ここで、規範的前提として採用するのが、J・E・ローマーによる「機会平等の原則」である<sup>24)</sup>。この原則を簡単に言えば、「本人のコントロールが及ばない要因によって生じた不平等を補償し、コントロール可能な要因によって生じた不平等は許容する」というものである。浜田宏氏との共同研究において筆者はすでに、このローマーのアイデアに基づき、経験的データを用いて性別や親の地位などの機会の差を仮想的に調整した社会の不平等度を測るシミュレーション分析を提案しているが<sup>25)</sup>、この手法の開発はこれまでの研究成果の上にさらにイザ

キの相対的剥奪指数を組み込むことで、理論的にも手法の簡便さの点でもさらなる革新を目指している。

#### 4.3 歴史理論

イザキの相対的剥奪モデル・指数の経験データ分析への応用や応用指数の開発といったこれまで紹介してきた研究プロジェクトは、どちらかと言えばテクニカルな応用研究の側面が強いものであった。しかし、このイザキの枠組みを用いることによって、大きく近代化・産業化に伴う社会意識の歴史的变化を、統一したモデル枠組みの下で捉えることができるのではないかと考え、高坂健次氏らとの共同研究を進めている。

第一に、まさにトクヴィルが活写したような、近代化の過程での身分・階級制の解体に伴う相対的剥奪感の高まり——これを、「相対的剥奪の第一のパラドクス」と呼ぶことにしよう——は、イザキ・モデルからの導出によって表現することができる。具体的には、所得（あるいはより一般的に社会的資源）分布を分割する「所得階級」を準拋集団とする社会における相対的剥奪度の社会的平均と、準拋集団が社会全体になった場合の社会的相

対的剥奪度を比較すると、後者の方が大きくなるのが定理として導き出せる<sup>⑧</sup>。これは、トクヴィルのいう障壁が取り払われた社会における「特有の憂鬱」に対応すると見なせるだろう。

第二に、社会全体が急速に豊かになるような「経済発展期」において、ある条件の下で、社会の富の総量が増大しジニ係数によって計られる不平等度が軽減するにもかかわらず、個人相対的剥奪度と社会的相対的剥奪度が増大することが、イザキのモデル枠組みを用いて証明することができる<sup>⑨</sup>。こうした現象は、中国など近年急成長する「後発発展国」において、必ずしも経済成長が社会的な幸福に結びつかないとする「幸福のパラドクス」にも対応するものであり、「相対的剥奪の第二パラドクス」といえるものである。

このように、近代化・産業化に伴って相対的剥奪がパラドキシカルに増大するフェーズに加えて、人々の主観の側でのヒューリスティックな「調整」もしくは「虚偽意識」効果が変わることが考えられる。

第三に、「第二パラドクス」と同様の条件下においても、平均所得で基準化した各個人の「相対基準の個人相対的

剥奪度」<sup>27)</sup>、そして平均所得で基準化した社会的相対的剥奪度(つまり、ジニ係数)は減少する。これは、所得の絶対額での比較ではなく、その時代時代の経済的基準を所与としての比較では不満は軽減することを意味している。絶対額での比較は、いわば過去の経済基準を引きずった比較であり、急激な経済発展の場合に起こりうると考えられる。一方、いったん経済発展が落ち着くと、人々は発展した経済状況に「慣れる」ために、過去の経済水準ではなく現在の水準で見る相対基準での比較が活性化すると考えられる。これは、人々の主観的な「慣れ」適応」メカニズムによって、相対的剥奪の昂進が、結果的に押さえられるというプロセスを表していると考えられる。

そして第四に、階層帰属意識の研究では、階層の評価次元が、例えば単一の所得次元から、資産・職業・学歴・家柄など多様化して行くにつれて、中意識化が起こることを説明するモデルがある<sup>28)</sup>。評価次元の多様化に伴って、比較次元としての総合評価次元が歪でない中心化した分布に近づいていくのであれば、総合評価次元における他者比較によって生じる相対的剥奪(厳密に言えば、

相対基準の社会的相対的剥奪度)は、例えば所得分布のように正の歪度を持つ不平等な分布を評価次元とした場合に比べて、減少することが予想される。このような理論的予想は、価値観が多様化・多元化するポスト経済発展期の社会において、現実はどうであれ主観的には強い剥奪感が生じにくくなるという可能性を示唆するものである。

イザキの相対的剥奪モデルから派生するこれら四つのフェーズでの理論的命題(予想)は、現時点では厳密な経験的対応物を伴わない、多分に仮説的な命題である。しかしながら、「イザキの相対的剥奪モデル」という理論モデルと指数を「縦糸」とすることによって、近代化・産業化という社会学の中心テーマとなる社会変動と意識変動、そしてこれに取り組んできたトクヴィルを始めとする歴々の社会変動論を、「相対的剥奪」という一つのモチーフによって再構成できるのではないかと考えている。そして、こうした取り組みが不必要すぎる「学得多様化」によって芯を失ったかに見える現代社会学に対して、一つの「骨太の社会学」を対置する試みになり得るのではないかと考えている<sup>29)</sup>。

## 5. おわりに

ここまで、イザキの相対的剥奪モデルと指数を出発点とする、筆者と共同研究者との一連の研究を紹介してきた。これらの多くのプロジェクトは今まさに現在進行形に進んでいる、そういう意味では「最前線」のものである。近年、日本においても、GDPや成長率などの経済指標だけでは測ることのできない「幸福」や「豊かさ」への関心が高まってきている。例えば、国や地方自治体レベルで幸福指標を作り、それを政策に活用していかうとする動きがある。あるいは、国王夫妻の来日も手伝って、国民総幸福（GNH）を国の政策の柱に据えるプータンへの関心が高まっている。人々は、客観的なモノやお金だけではなく、主観的な意識の重要性に（再び）気づき始めているように見える。こうした社会状況下にあつて、社会学の立場から相対的剥奪の理論を持つて、積極的な貢献ができる研究を目指していきたい。

### 【付記】

本研究は、科学研究費補助金研究「グローバルゼーション

ン下の不平等社会における相対的剥奪——理論・実証的研究の刷新」（基盤（B）二二三三〇一七一、二〇一〇一—一三年度、代表：石田淳）の研究成果の一部である。

### 【注】

① S. A. Stouffer, E. A. Suchman, L. C. DeViney, S. A. Star, and R. M. Williams Jr., 1949, *The American Soldier: Adjustment during Army Life*, Princeton: Princeton University Press.

② 社会学的な観点からの相対的剥奪論の学説史としては、高坂健次による一連の研究ノート（二〇〇九〜二〇一二、「相対的剥奪論 再訪（一）〜（七）」、『関西学院大学社会学部紀要』一〇八〜一一四号）が参考になる。

③ トクヴィル著、松本礼二訳、二〇〇五／二〇〇八、『アメリカのデモクラシー 第一巻（上・下） 第二巻（上・下）』岩波書店。

④ *Ibid.* 第二巻（上）二三八頁。

⑤ *Ibid.* 第二巻（上）二三七頁。

⑥ アレクシス・ド・トクヴィル、小山勉訳、一九九八、『旧体制と大革命』ちくま書房、三五三—六七頁。

⑦ 富永茂樹、二〇一〇、『トクヴェル 現代へのまなざし』岩波

書店、三四―五頁。

- ⑧ Stouffer et. al. 1949 p. 257.
- ⑨ 高坂健次、二〇〇九、「相対的剥奪論 再訪(一)」『関西学院大学社会学部紀要』一〇八号。
- ⑩ ロバート・K・マートン、森東吾ほか訳、一九六一、『社会学論と社会構造』みすず書房。
- ⑪ W. G. Runciman, 1966, *Relative Deprivation and Social Justice: A Study of Attitudes to Social Inequality in Twentieth-century England*, London: Routledge & Kegan Paul.
- ⑫ これを、高坂健次は相対的剥奪論の「個人主義的転回」と呼んでいる。高坂健次、二〇二二、「相対的剥奪論 再訪(七)」『関西学院大学社会学部紀要』一一四号。
- ⑬ Runciman 1966 p. 10.
- ⑭ 例 々 々、F. Crosby, 1976, "A Model of Egoistical Relative Deprivation," *Psychological Review*, 83(2): 85-113.
- ⑮ S. Yitzhaki, 1979, "Relative Deprivation and the Gini Coefficient," *Quarterly Journal of Economics*, 93(2): 321-4.
- ⑯ J. D. Hey, and P. J. Lambert, 1980, "Relative Deprivation and the Gini Coefficient: Comment," *Quarterly Journal of Economics* 95(3): 567-73.
- ⑰ ルベーク積分表記をしているが、 $f(y)$ を所得分布の確率密度関数とする、結局  $dF(y) = f(y)dy$  となる。
- ⑱ 石田淳、二〇一一、「相対的剥奪と準拠集団の計量モデル ―― Yitzhaki の個人相対的剥奪指数の応用」『理論と方法』二六巻二号、三七―八八頁。
- ⑲ 前田豊・石田淳、二〇一一、「他者比較による主観的地位分布と階層帰属意識分布」第八回日本社会学会大会報告。Yutaka Maeda, and Aisushi Ishida, 2012, "Subjective Income Status and Class Identification," Paper Presented at the 40th World Congress of the International Institute of Sociology.
- ⑳ 石田淳、二〇一一、「最適地位選択モデルによる主観的地位分布の説明」第五二回数理社会学会大会報告。
- ㉑ イザキの相対的剥奪指数の発展や不平等指数との関連の概説とこゝ以下を参照。F. A. Cowell, 2008, "Gini, Deprivation and Complaints," pp. 25-44 in G. Betti and A. Lemmi (eds.), *Advances on Income Inequality and Concentration Measures*, London: Routledge.
- ㉒ 石田淳、二〇一一、『機会不平等に起因する相対的剥奪』による「係数の分解」第五二回数理社会学会大会報告。石田淳、二〇一一、「機会不平等に起因する相対的剥奪指数」第

八四回日本社会学会大会報告。

⑳ J. E. Roemer, 1998, *Equality of Opportunity*, Cambridge: Harvard University Press.

㉑ 浜田宏・石田淳、二〇〇三、「不平等社会と機会の均等——機会格差調整後の不平等度測定法」『社会学評論』五四巻三号、二二二～二四九頁。

㉒ S. Yitzhaki, 1982, "Relative deprivation and economic welfare," *European Economic Review*, 17(1): 99-113.

㉓ 高坂健次・石田淳・浜田宏、二〇一〇、「相対的剥奪のパラドックス」第五一回数理社会学会大会報告。

㉔ S. R. Chakravarty, 2009, "Deprivation, Inequality and Welfare," *Japanese Economic Review*, 60(2): 172-190.

㉕ 多元的な他者比較による階層イメージと階層帰属意識生成を説明したのとして Fararo-Kosaka モデルがある。T. J.

Fararo and K. Kosaka, 2003, *Generating Images of Stratification: A Formal Theory*, Dordrecht: Kluwer Academic Publisher. 高坂

健次、二〇〇六、『社会学におけるフォーマル・セオリー——階層イメージに関するFSモデル【改訂版】』ハーベスト社。また、中意識現象を「地位の非一貫性」の増大によって説明する研究として以下の研究がある。今田高俊・原純輔、

一九七九、「社会的地位の一貫性と非一貫性」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会、一六一～一九七頁。

㉖ Asushi Ishida, Kenji Kosaka, Hiroshi Hamada, and Yutaka Maeda, 2012, "Economic Growth and Paradoxes of Relative Deprivation," Paper Presented at the 40th World Congress of the International Institute of Sociology.

(人間科学部准教授・二〇二二年四月着任)